第Ⅳ部門　　観光行動からみた小京都の魅力に関する考察
－飛騨高山を例として－

福井工業大学大学院　学生員　○柏原　康之
福井工業大学　　学生員　　田中　智
福井工業大学　　正会員　　和田　章仁

1．はじめに

近年、都市空間の快適性が重要視されてきており、魅力的な町並み景観を形成する都市が増えてきている。そのなかで、歴史的に良好な景観を有している地方都市においても、町並み景観の整備や保全が行われている。また、これらの都市の中で、それぞれの風土に培われた歴史を積み重ね、独自の文化を育んできた歴史都市が小京都と呼ばれている。

そこで、本研究ではこれら小京都に着目して、観光客を対象としたアンケート調査を行い、小京都らしさおよび観光客の行動と小京都の魅力との関係について分析するものである。

2．調査概要

調査は、平成 13 年 10 月、高山市において観光客を対象としたアンケート調査を行った。調査項目は個人属性（性別、年齢、居住地）、訪問回数、滞在予定時間、小京都らしさ、小京都を構成している要素、および観光行動についてである。取得票数は意識調査が 301 票で、そのうち観光行動まで記入しているのは 182 票（60.5%）であった。

3．調査結果

3－1　性別と年齢

性別では、男性が 36.5%、女性が 63.5%と女性の方が多く、年齢別では、20 代が 42.9%、続いて 50 代の 18.9%となっていた（表 1 参照）。

3－2　滞在予定時間と訪問回数

訪問回数別では、「初めて」「2 回目」および「3 回以上」の 3 項目で比較した結果、「3 回以上」が 38.3%と高率であり、リピーターは約 6 割であった（図 1 参照）。また、滞在予定時間別では「2 時間以内」から「3 日以上」の 5 段階に分類集計した。その結果、「半日」が 42.9%と最も高く、続いて「1 泊 2 日」が 25.2%であった（図 2 参照）。

3－3　被験者が感じている小京都らしさ

観光客が感じている小京都らしさを「非常に感じる」から「全く感じない」の 6 段階に分類集計した。その結果、「非常に感じる」「まあまあ感じる」の 2 つで 8 割以上を占めていることから、観光客は高山に対して小京都らしさを強く感じていることがわかった（図 3 参照）。この調査は、過年度調査[1]と同様である。

3－4　観光ルートの類型化

観光行動と小京都の魅力との関係について把握するため、被験者がどのようなルートで観光しているのかを、観光ルート調査票に記入してもらい分析したところ、5 つの行動パターンに類型化でき

表 1　男女別年代

	男性 (%)	女性 (%)	合計 (%)
10代	1 (0.9)	2 (1.0)	3 (1.0)
20代	32 (29.1)	97 (50.8)	129 (42.9)
30代	30 (27.3)	26 (13.6)	56 (18.6)
40代	13 (11.8)	17 (8.9)	30 (10.0)
50代	24 (21.8)	33 (17.3)	57 (18.9)
60代	8 (7.3)	11 (5.8)	19 (6.3)
70才以上	2 (1.8)	5 (2.6)	7 (2.3)
合計	110 (100.0)	191(100.0)	301(100.0)

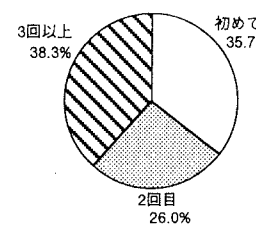

図1　訪問回数構成

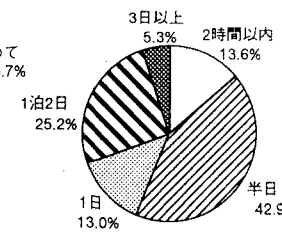

図2　滞在予定時間構成

Yasunobu KASHIWABARA, Akira TANAKA, Akihito WADA

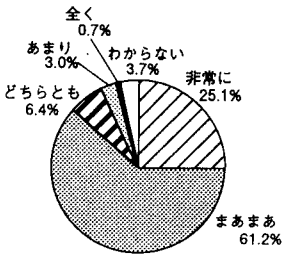

図3　小京都らしさの程度

た。

①回遊型･･･ある区域を一周するか、あるいは、行き帰りとで辿る道筋に重複のないルート。

②往復型･･･始点と終点との道筋に分岐がなく、行き帰りが同一のルート。

③寄り道型･･･複数の目的地があり、そこに対し重点的に訪れているルート。

④徘徊型･･･ある区域内をくまなく散策するルート。

⑤混合型･･･２つ以上のルートが組み合わされているパターン。

この中で一番高い割合いのものが「往復型」の40.1％であり、続いて「寄り道型」の 25.3％であった（図４参照）。なお、「回遊型」は４票（2.2％）と極端に少ない結果となったことから、以下の分析から除外した。

３－５　訪問回数・滞在時間と観光行動との比較

観光行動のパターンを訪問回数で比較すると、「往復型」では「初めて」が高く、リピーターで

パターン	名　称	サンプル数	%
	回遊型	4	2.2
	往復型	73	40.1
	寄り道型	46	25.3
	徘徊型	31	17.0
	混合型	28	15.4
		182	100.0

図4　観光行動の類型化

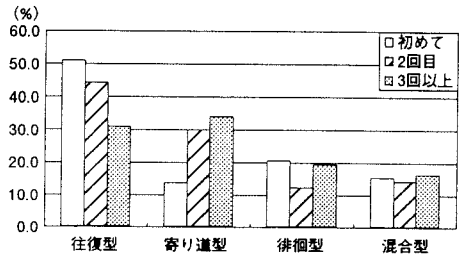

図5　訪問回数と観光行動パターンとの比較

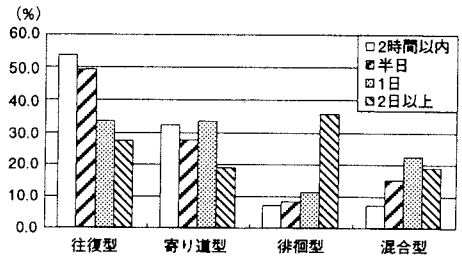

図6　滞在時間と観光行動パターンとの比較

は低くなっており、「寄り道型」では「３回以上」が高率で、訪問回数が少なくなるに従って低率になっていた（図 5 参照）。一方、滞在予定時間との比較によると、「往復型」では「2 時間以内」や「半日」などの短い滞在時間が高率となっており、「徘徊型」では「2 日以上」が他と比較して高率となっていた（図６参照）。

４．まとめ

本調査の結果から、次のような知見を得ることができた。高山市における観光客の意識と観光行動を比較するため、観光行動パターンを類型化した。その結果、「往復型」や「寄り道型」の割合が高くなっており、訪問回数別では「往復型」は全体的に高い割合であり、特に「初めて」が高率であった。また、滞在予定時間の比較では、「往復型」は「2 時間以内」や「半日」などの短い滞在時間が高率となっていることから、「初めて」や短時間での観光は単純なルートを選択する傾向が強いことがわかった。

［参考文献］

1）柏原康之・和田章仁；観光客からみた飛騨高山の町並み景観に関する考察，土木学会関西支部年次学術講演集，pp. Ⅳ-66-1～2，2000 年５月